

令和7年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和 8 年 2 月 24 日

札幌市立 新川西中学校

1 新川西パートナー校における学校関係者評価

分野	重点項目	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
			達成状況	改善方針	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
目指す子ども像	自分自身を高めようとする子	重点項目の達成に向け、各学校段階でつながりを意識した取組を進めている	B	○年度当初に計画した具体的取組については、ほぼ実施することができた。また中高連携した新たな取組に着手できたことも成果と言える。 ○次年度以降は、子どもたちの連携の質を上げるような取組の工夫についてCSで検討していきたい。	A	A
今年度の重点	子どもの声を聴く	子どもの声を聴き、それを生かした取組を進めている	A	○第2回準備委員会で、中学生の声を聴き、自治的な活動や地域連携について有意義な対話があった。また次年度以降の取組についての示唆を得ることもできた。 ○次年度以降は、高校生や小学生の声を聴く機会を設定し、それに基づいた具体的な取組についてCSで検討していきたい。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		○新川西パートナー校1年目の取組としては、妥当な自己評価と言える。次年度以降、BをAに上げていくためには、小中高の学校段階のつながりの強化はもとより、地域とのつながりを模索するとともに、地域住民の立場である私たちが、いかにその担い手を巻き込んでいくのかという視点も必要になってくると思われる。 ○子どもの声を聴くについては、一部ではなくどの子の声も聴くというスタンスが大切であり、その意味では、小中高の子どもたちと地域の大人が一体となった取組(例えば「あいさつ運動」等)を展開しながら、日常の子どもたちの生の声を拾い上げるなど、次年度こそ、学校運営協議会としての具体的な動き出しを期待したい。				

2 新川西中学校における学校関係者評価

分野	重点項目	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
			達成状況	改善方針	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
学校経営スローガン	経営方針	生徒の声を真摯に聞き、誰一人取り残さず「自分が大切にされている」と実感できる学校経営を進めている	A	○9割の生徒が肯定的評価をしており、教職員の高い自己評価と合わせ、経営方針の本質を踏まえた学校経営を進めてきていると判断できる。 ○次年度以降は、残り1割の生徒への支援の在り方を検討しつつ、可能なところから実践していく。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		○自己評価は妥当だが、生徒の5%、保護者の10%が「わからない」と回答していることについての分析が必要であろう。「わからない」と回答している生徒は、「自分が大切にされている」と実感できる機会に恵まれなかったり、困り感を自ら発信できなかったりしていることも考えられるため、次年度以降は、より多くの教職員による生徒への見守りを期待したい。				

「人間尊重の教育」の徹底による学校づくり	学習活動	教員が生徒を「育てる」から、生徒が自ら「育つ」取組へと転換を図っている	B	○教員の8割が肯定的評価をしつつも、生徒の肯定的評価が77%、保護者に至っては59%と開きがあり、自ら学ぶとする主体的学習者への取組は道半ばの状況と言える。 ○次年度以降は、保護者との連携の下、より一層、家庭学習とのつながりを意識した授業展開を工夫していく。	A	A
	人間関係	自分を大切に、自己肯定感・自己有用感を高める取組を通して、相互承認の態度向上を図っている	A	○肯定的評価が、生徒88%、保護者84%、教職員95%と、三者とも高い状況にあり、経営方針の浸透が具体的実践に結びついていると判断できる。 ○次年度以降は、経営方針の項目同様、残り1割強の生徒に対する支援を検討し、取組を進めていく。	A	A
	学習環境いじめ対策	同質性重視から多様性重視への転換を図るとともに、徹底したいじめ防止対策の取組等を進め、全ての生徒にとって安心・安全な学校空間を創出している	B	○肯定的評価の教職員が95%に対し、生徒が69%、保護者が64%と開きがあることから、安心・安全な学校環境に向けた取組は、道半ばと判断せざるを得ない。加えて、保護者の12%が「わからない」と回答していることは課題と言える。 ○次年度以降は、より丁寧な生徒の声を聴くとともに、いじめ対策等に関する取組を広く広報するなどして、保護者との連携の下、安心・安全な学校空間の創出に取り組んでいく。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		○学習活動については、詰込みによる「やらされ感」ではなく、のびのびとした中で自ら学習に取り組むことが大切であり、次年度以降、小中で連携し、学ぶことの楽しさを実感できるような授業研究等に取り組むことを期待したい。 ○いじめ対策については、かなりきめ細かに取り組んでいることは評価できるが、このアンケート結果からは、まだまだ子どものサインを拾い切れていないことが想定される。次年度以降、より多様な子どもたちの困り感に気付けるよう、様々なタイプの教職員がチームで対応し、情報を共有するような取組を期待したい。				
「知・徳・体の調和のとれた学び」の推進	学ぶ力の育成	個に応じたきめ細かな学習支援を通して、基礎的な知識・技能を習得した主体的な学習者を育成している	A	○肯定的評価が、生徒88%、保護者70%、教職員95%と、いずれも「学習活動」の項目よりも高い。基礎的な知識・技能の習得に向けた取組は成果が上がりつつあると判断できる。 ○次年度以降は、保護者の13%が「わからない」と回答していることを踏まえ、保護者との連携について検討していく。	A	A
	豊かな心の育成	チーム支援体制による、発達支持的生徒指導の重視と命を大切にすることを徹底し、自尊感情の育成を図っている	A	○肯定的評価の教職員が95%に対し、生徒78%、保護者74%と若干の開きがある。概ね目標は達成されているものの、一部、教職員の支援とのミスマッチが生じている懸念がある。 ○次年度以降は、シャボテンログ等を活用しつつ、より多くの教職員がきめ細かく生徒に寄り添うよう努めていく。	A	A
	健やかな体の育成	生徒主体による楽しい運動機会の創出を図っている	A	○肯定的評価が三者とも8割となっており、運動の好きな生徒にとっては、一定の成果が上がっているものと判断できる。 ○次年度以降は、残り2割の運動を得意としないと思われる生徒への働きかけについて検討を進める。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		○豊かな心の育成については、引き続き、「子どもは大人を見ている」「子どもは大人の真意を見抜く」ということを念頭に置きつつ、真摯に子どもと向き合っていくことを期待したい。 ○健やかな体の育成については、運動が苦手な生徒が、できないことを恐れずに楽しく体を動かす気持ちになれるような環境作りが大切であり、いじめ対応同様、お互いを人間として尊重し認め合える関係性を構築することで、小さな達成感を味わい、得意不得意にかかわらず安心して運動できるようになるのではないかな。				
「社会に開かれた教育課程」実施に向けた環境整備	CS移行を見据えた異校種間連携	パートナー校の教職員同士の信頼関係強化に向けた取組の充実を図っている	A	○教職員の肯定的評価が100%であり、昨年度から大きな改善が見られたが、生徒、保護者は、「わからない」という回答が多いのが現状であり、これからの段階。 ○次年度以降は、CSとともに、少しずつ、生徒・保護者が異校種間連携を意識できるような取組を進めていく。	A	A
	働き方改革	敢えて生徒に向き合わない時間を創出することへの理解を踏まえた、持続可能な学校環境を実現している	B	○肯定的評価が、生徒77%、保護者59%、教職員52%といずれも低い。教職員の超過勤務により、幸うじて現状の教育環境が維持されていることが懸念される。 ○次年度以降は、真に生徒のために持続可能な学校環境の実現という観点について、保護者との共通理解を図りながら、より実効性のある教職員の働き方改革を進めていく。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		○働き方改革の推進が待たなしの状況にあることは十分理解しているが、現状の教職員の数を前提に取組を進めることは、もはや限界と思われる。評価をAにするためには、より多くの多様な人材を学校に投入することが必須であり、国をはじめ行政側の本気の取組を切に願うところ。				